授業を通じた生活指導のあり方に関する実証的研究

東京学芸大学　山田雅彦
東京学芸大学　林　尚示

本発表は、授業に特有の現象とされ、長く批判と改善の対象とされてきた教師優位のコミュニケーションが、学級内に良好な人間関係を築く上で重要な働きをしていることを指摘するものである。

従来、授業中のコミュニケーションに関して、教師の圧倒的優位が指摘されてきた。ミアン(Mehan)が指摘した発問－応答－評価型の授業や、マッコール(McHoul)が「教師だけが創造的な発話を行なう資格のある者を決定することができる」と指摘した授業独自の会話の順番取り規則がその代表的な例である。

しかし、近年、教師優位のコミュニケーションが成り立ちにくくなっている。私語や立ち歩きをはじめとする児童生徒の私的行動によって授業の実施が困難になる現象（いわゆる「学級崩壊」）さえ問題となっている。発表者らは、このような状況の内において、児童の私語・不規則発言・立ち歩き・手いたずらなどに教師が対処する方略について、会話分析の手法を用いて追究してきた。

そして、その追究の過程で、教師が授業中のコミュニケーションを強く統制することによって、児童間の衝突を回避したり、誤答や不規則発言を授業に貢献する正規の発言として処理することに成功している場面を複数見出した。発話者を指定したり児童の応答を評価したりする権限を、教師がほぼ独占する授業中のコミュニケーションには、児童－教師間ないしは児童相互間に良好な人間関係を築くという積極的機能を見出すことができるのである。

研究の手続きは以下の通りである。

(1)調査対象：東京都内 A 小学校（児童数約 600 人）の６年生の一学級（男子 14 人、女子 14 人。担任教師は教員歴 23 年の男性）での授業 26 回分。

(2)調査期間：2005 年 5 月から 2006 年 2 月。なお、これに先だって、2005 年 2 月から 3 月にかけて同じ学級で授業 3 回分の試験的な録画を行い、児童と教師の録画・録音への馴致期間とした。

(3)録画・録音・文字化：校長の事前承諾を得て、教室前方と後方に録音機を各１、教室後方にビデオカメラを１設置した。ビデオカメラには広角レンズを装着し、授業中の操作は行わずに、常時教師と全児童を撮影した。録画・録音時、発表者らは教室後方でメモをとりながら授業を参観した。会話記録の作成には、主として教室後方の録音機の記録を用い、聞き取り不能箇所や音声に伴う動作を確認するために教室前方での録音と録画記録を適宜参照した。

(4)対象場面の抽出：会話記録から、教師が児童の発話機会を統制したり、発話内容を評価したりしていると見なしうる場面を抽出し、それが児童に対して発揮しうる効果を分析した。

分析結果は、当日配布する補助資料に詳述する。

謝辞

調査にご協力くださったＡ小学校に厚く御礼申し上げます。

付記

本発表は、日本学術振興会科学研究費による学術研究「「学級崩壊」の抑止に資する、授業過程における教師の統制行動に関する実証的研究（課題番号 17530640、基盤研究(C)）」の成果の一部である。